

オツベルと象

宮沢賢治

青空文庫

……ある牛飼いがものがたる

第一日曜

オツベルときたら大したもんだ。稲扱器械の六台も据えつけて、のんのんののんのんと、大そろしない音をたててやっている。

十六人の百姓どもが、顔をまるつきりまっ赤にして足で踏んで器械をまわし、小山のように積まれた稲を片っぱしから扱いて行く。藁はどんどんうしろの方へ投げられて、また新らしい山になる。そこらは、粃や藁から発ったこまかな塵で、変にぼうつと黄いろになり、まるで沙漠のけむりのようだ。

そのうすくらしい仕事場を、オツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吹殻を藁に落さないよう、眼を細くして気をつけながら、両手を背中に組みあわせて、ぶらぶら往ったり来たりする。

小屋はずいぶん頑丈で、学校ぐらいもあるのだが、何せ新式稲扱器械が、六台もそ

ろってまわってるから、のんのんのんふるうのだ。中にはいるとそのため、すつかり腹が空くほどだ。そしてじつさいオツベルは、そいつで上手に腹をへらし、ひるめしどきには、六寸ぐらいのビフテキだの、雑ぞうきん中ほどあるオムレツの、ほくほくしたのをたべるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんやっていた。

そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやって来た。白い象だけ、ペンキを塗ぬったのでないぜ。どういうわけで来たかって？ そいつは象のことだから、たぶんぶらつと森を出て、ただなにとなく来たのだろう。

そいつが小屋の入口に、ゆつくり顔を出したとき、百姓どもはぎよつとした。なぜぎよつとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないじやないか。かかり合つては大へんだから、どいつもみな、いっしょうけんめい、じぶんの稲を扱っていた。

ところがそのときオツベルは、ならんだ器械のうしろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらつと鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、何でもないといいふうで、いままでもおり往つたり来たりしていたもんだ。

するとこんどは白象が、片かたあし脚床あしゆかにあげたのだ。百姓どもはぎよつとした。それでも仕

事が忙^{いそ}しいし、かかり合^あってはひどいから、そつちを見^みずに、やっぱり稲^{いね}を扱^あいていた。

オツベルは奥^{おく}のうすくらいところで両手^{りょうて}をポケットから出して、も一度ちらつと象を見^みた。それからいかにも退^{たい}屈^{くつ}そうに、わざと大きなあくびをして、両手^{りょうて}を頭のうしろに組^くんで、行^いつたり来^きたりやつていた。ところが象^{ぞう}が威勢^{いせい}よく、前肢^{まえあし}二つつきだして、小屋^{こや}にあがって来^きようとする。百姓^{ひやくしやう}どもはぎくつとし、オツベルもすこしぎよつとして、大きな琥珀^{こはく}のパイプから、ふつとけむりをはきだした。それでもやつぱりしらないふうで、ゆつくりそこらがある^あっていた。

そしたらとうとう、象^{ぞう}がこのこ上^{かみ}つて来^きた。そして器械^{きぎ}の前^{まえ}の^とこを、呑氣^{のんき}にある^あきはじめたのだ。

ところが何^{なに}せ、器械^{きぎ}はひどく廻^{まわ}つていて、粉^{こな}は夕立^{ゆふだち}か霰^{あられ}のように、パチパチ象^{ぞう}にあたるのだ。象^{ぞう}はいかにもうるさいらしく、小さなその眼^{まなこ}を細^{こま}めていたが、またよく見ると、たしかに少しわらつていた。

オツベルはやつと覚悟^{かくご}をきめて、稲^{いね}扱^あ器械^{きぎ}の前^{まえ}に出^いて、象^{ぞう}に話をしようとしたが、そのとき象^{ぞう}が、とてもきれいな、驚^{うぐい}み^すたいない声^{こゑ}で、こんな文句^{ぶんく}を云^いつたのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂^{すな}がわたしの齒^はにあたる。」

まったく糲は、パチパチパチパチ歯にあたり、またまっ白な頭や首にぶつつかる。

さあ、オツベルは命懸けた。パイプを右手にもち直し、度胸を据えて斯う云った。

「どうだい、此処は面白いかい。」

「面白いねえ。」象がからだを斜めにし、眼を細くして返事した。

「ずうつとこつちに居たらどうだい。」

百姓どもははつとして、息を殺して象を見た。オツベルは云ってしまったから、にわか
にがたがた顫え出す。ところが象はけろりとして

「居てもいいよ。」と答えたもんだ。

「そうか。それではそうしよう。そういうことにしようじゃないか。」オツベルが顔をく
しやくしやにして、まっ赤になつて悦びながらそう云った。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。いまに見たまえ、オツベルは、あ
の白象を、はたらかせるか、サーカス団に売りとばすか、どつちにしても万円以上もうけ
るぜ。

第二日曜

オツベルときたら大したもんだ。それにこの前稲扱小屋で、うまく自分のものにした、象もじつさい大したもんだ。力も二十馬力もある。第一みかけがまっ白で、牙きばはぜんたいきれいな象牙ぞうげでできている。皮も全体、立派じょうぶで丈夫な象皮なのだ。そしてずいぶんはたらくもんだ。けれどもそんなに稼かせぐのも、やっぱり主人が偉えらいのだ。

「おい、お前は時計は要いらないか。」丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀きのパイプをくわえ、顔をしかめて斯きう訊いた。

「ぼくは時計は要いらないよ。」象がわらつて返事した。

「まあ持つて見ろ、いいもんだ。」斯きう言いながらオツベルは、ブリキでこさえた大きな時計を、象の首からぶらさげた。

「なかなかいいね。」象も云う。

「鎖くさりもなくちやだめだろう。」オツベルときたら、百キロもある鎖をさ、その前肢にくつつけた。

「うん、なかなか鎖はいいね。」三あし歩いて象がいう。

「靴くつをはいたらどうだろう。」

「ぼくは靴などはかないよ。」

「まあはいてみる、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張子の大きな靴を、象のうしろのかかとははめた。

「なかなかいいね。」象も云う。

「靴に飾りかぎをつけなくちや。」オツベルはもう大急ぎで、四百キロある分銅を靴の上から、穿はめ込んだ。

「うん、なかなかいいね。」象は二あし歩いてみて、さもうれしそうにそう云った。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくぎな紙の靴とはやぶけ、象は鎖と分銅だけで、大よろこびであるいて居おった。

「済まないが税金も高いから、今日はすこうし、川から水を汲くんでくれ。」オツベルは両手をうしろで組んで、顔をしかめて象に云う。

「ああ、ぼく水を汲んで来よう。もう何ばいでも汲んでやるよ。」

象は眼を細くしてよろこんで、そのひるすぎに五十だけ、川から水を汲んで来た。そして菜っ葉の畑にかけた。

夕方象は小屋に居て、十把ばの藁わらをたべながら、西の三日の月を見て、

「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さっぱりするねえ」と云っていた。

「済まないが税金がまたあがる。今日は少うし森から、たきぎを運んでくれ」オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしにつつまんで、次の日象にそう言った。

「ああ、ぼくたきぎを持って来よう。いい天気だねえ。ぼくはぜんたい森へ行くのは大すぎなんだ」象はわらってこう言った。

オツベルは少しぎよつとして、パイプを手からあぶなく落としそうにしたがもうあのときは、象がいかにも愉快なふうで、ゆっくりあるきだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さな咳を一つして、百姓どもの仕事の方を見に行った。

そのひるすぎの半日に、象は九百把たきぎを運び、眼を細くしてよろこんだ。

晩方象は小屋に居て、八把の藁をたべながら、西の四日の月を見て

「ああ、せいせいした。サンタマリア」と斯うひとりごとしたそうだ。

その次の日だ、

「済まないが、税金が五倍になった、今日は少うし鍛冶場へ行つて、炭火を吹いてくれな
いか」

「ああ、吹いてやろう。本気でやつたら、ぼく、もう、息で、石もなげとばせるよ」

オツベルはまたどきつとしたが、気を落ち付けてわらっていた。

象はそのそ鍛冶場へ行つて、べたんと肢を折つて座り、ふいごの代りに半日炭を吹いたのだ。

その晩、象は象小屋で、七把わの藁をたべながら、空の五日の月を見て

「ああ、つかれたな、うれしいな、サンタマリア」と斯う言った。

どうだ、そうして次の日から、象は朝からかせぐのだ。藁も昨日はただ五把だ。よくまあ、五把の藁などで、あんな力がでるもんだ。

じつさい象はけいざいだよ。それというのもオツベルが、頭がよくてえらいためだ。オツベルときたら大したもんさ。

第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、おれも云おうとしてたんだが、居なくなつたよ。

まあ落ちついてききたまえ。前にはなしたあの象を、オツベルはすこしひどくし過ぎた。しかたがだんだんひどくなつたから、象がなかなか笑わなくなつた。時には赤い竜りゅうの眼を

して、じつとこんなにオツベルを見おろすようになってきた。

ある晩象は象小屋で、三把の藁をたべながら、十日の月を仰ぎ見て、

「苦しいです。サンタマリア。」と云つたということだ。

こいつを聞いたオツベルは、ことごと象につらくした。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、藁もたべずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」と斯う言つた。

「おや、何だつて？ さよならだ？」月が俄かに象に訊く。

「ええ、さよならです。サンタマリア。」

「何だい、なりばかり大きくて、からつきし意気地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月がわらつて斯う云つた。

「お筆も紙ありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しくしくしく泣き出した。

「そら、これでしょう。」すぐ眼の前で、可愛い子どもの声が出た。象が頭を上げて見ると、赤い着物の童子が立つて、硯と紙を捧げていた。象は早速手紙を書いた。

「ぼくはずいぶん眼にあつている。みんなまで出て来て助けてくれ。」

童子はすぐに手紙をもつて、林の方へあるいて行った。

赤衣せきいの童子が、そうして山に着いたのは、ちょうどひるめしごろだった。このとき山の象どもは、沙羅樹さらじゆの下のくらがりで、碁ごなどをやっていたのだが、額をあつめてこれを見た。

「ぼくはずいぶん眼にあつている。みんな出てきて助けてくれ。」

象は一せいに立ちあがり、まつ黒になつて吠ほえだした。

「オツベルをやつつけよう」議長の象が高く叫さけぶと、

「おう、でかけよう。グララアガア、グララアガア。」みんながいちどに呼応する。

さあ、もうみんな、嵐あらしのように林の中をなきぬけて、グララアガア、グララアガア、野原の方へとんで行く。どいつもみんななきちがいだ。小さな木などは根こぎになり、藪やぶや何かもめちやめちやだ。グワア　グワア　グワア　グワア、花火みたいに野原の中へ飛び出した。それから、何の、走つて、走つて、とうとう向うの青くかすんだ野原のはてに、オツベルの邸やしきの黄いろな屋根を見附みつけると、象はいちどに噴火ふんかした。

グララアガア、グララアガア。その時はちょうど一時半、オツベルは皮の寝台しんだいの上でひるねのさかりで、烏からすの夢を見ていたもんだ。あまり大きな音なので、オツベルの家の百

子どもが、門から少し外へ出て、小手をかぎして向うを見た。林のような象だろう。汽車より早くやってくる。さあ、まるつきり、血の気も失せてかけ込んで、

「旦那あ、象です。押し寄せやした。旦那あ、象です。」と声をかぎりに叫んだもんだ。

ところがオツベルはやつぱりえらい。眼をぱちりとあいたときは、もう何もかもわかっていた。

「おい、象のやつは小屋にいるのか。居る？ 居る？ 居るのか。よし、戸をしめろ。戸をしめるんだよ。早く象小屋の戸をしめるんだ。ようし、早く丸太を持って来い。とじこめちまえ、畜生めじたばたしやがるな、丸太をそこへしぼりつけろ。何ができるもんか。わざと力を減らしてあるんだ。ようし、もう五六本持つて来い。さあ、大丈夫だ。大丈夫だとも。あわてるなつたら。おい、みんな、こんどは門だ。門をしめろ。かんぬきをかえ。つつぱり。つつぱり。そうだ。おい、みんな心配するなつたら。しっかりしろよ。」

オツベルはもう支度ができて、ラツパみたいないい声で、百姓どもを上げました。ところがどうして、百姓どもは気が気じやない。こんな主人に巻き添いなんぞ食いたくないから、みんなタオルやはんけちや、よごれたような白いようなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をするしるしなのだ。

オツベルはいよいよやつきとなつて、そこらあたりをかけまわる。オツベルの犬も気が立って、火のつくように吠えながら、やしきの中をはせまわる。

間もなく地面はぐらぐらとゆられ、そこらはばしやばしやくらくらくなり、象はやしきをとりました。グララアガア、グララアガア、その恐ろしいさわぎの中から、

「今助けるから安心しろよ。」やさしい声もきこえてくる。

「ありがとう。よく来てくれて、ほんとに僕はうれしいよ。」象小屋からも声がする。さあ、そうすると、まわりの象は、一そうひどく、グララアガア、グララアガア、塀のまわりをぐるぐる走っているらしく、度々中から、怒ってふりまわす鼻も見える。けれども塀はセメントで、中には鉄も入っているから、なかなか象もこわせない。塀の中にはオツベルが、たつた一人で叫んでいる。百姓どもは眼もくらみ、そこらをうろろするだけだ。そのうち外の象どもは、仲間のからだを台にして、いよいよ塀を越しかかる。だんだんにゆうと顔を出す。その皺くちやで灰いろの、大きな顔を見あげたとき、オツベルの犬は気絶した。さあ、オツベルは射ちだした。六連発のピストルさ。ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ところが弾丸は通らない。牙にあたればはねかえる。一疋なぞは斯う言った。

「なかなかこいつはうるさいねえ。ぱちぱち顔へあたるんだ。」

オツベルはいつかどこかで、こんな文句をきいたようだと思いなながら、ケースを帯からつめかえた。そのうち、象の片脚が、塀からこつちへはみ出した。それからも一つはみ出した。五匹の象が一ぺんに、塀からどつと落ちて来た。オツベルはケースを握ったまま、もうくしやくしやに潰れていた。早くも門があいていて、グララアガア、グララアガア、象がどしどしなだれ込む。

「牢はどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マッチのようにへし折られ、あの白象は大へん瘠せて小屋を出た。

「まあ、よかつたねやせたねえ。」みんなはしずかにそばにより、鎖と銅をはずしてやつた。

「ああ、ありがとう。ほんとにぼくは助かったよ。」白象はさびしくわらってそう云った。おや「一字不明」、川へはいつちやいけないいたら。

青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十三巻」筑摩書房

1980（昭和55）年3月

※「〔一字不明〕」は、底本編集時の注記です。

入力：r.sawai

校正：篠宮康彰

1999年2月6日公開

2011年2月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

オツベルと象

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>